未来をつくる
140TH
ONE FOR ALL

地域と共動 見つめる未来

2022

会社案内

Corporate Profile

山陰中央新報社

地域とともに 140周年

代表取締役社長
松 尾 倫 男

山陰中央新報は今年5月1日、前身の山陰新聞創刊から140周年を迎えました。1882(明治15)年以降、明治、大正、昭和、平成、令和の五つの時代を地域と共に歩んできました。取材拠点は山陰両県に16か所と東京、広島にあり、国政や地方政治の状況、経済・産業分野やエネルギー政策、さらにスポーツや文化、地域活動の報道を通して、課題の指摘や提言を続けてきました。

昨春、新たなデジタルサービス「山陰中央新報デジタル」を始めました。山陰両県や国内外の主要ニュースや速報、解説記事をはじめ、防犯やスポーツ、グルメ、新型コロナウイルスなど生活に密着した情報を、スマートフォンやパソコンで、いつでもどこでもさまざまな情報を届けています。コンテンツ(内容)や機能は、皆さまの声を聞きながら順次、拡充しています。

創刊140周年を機に、これからの歴史を開く統一テーマとして「未来をつくる 1(one)4(for)0(all)」を掲げました。one for all=1人は全員のために=の精神で分断を克服し、明るい未来を次世代に引き継ぐという決意を込めています。紙面は、少子高齢化が進み、持続可能な地域づくりが問われる中、将来を担う若者や子どもが暮らしたいと思える都市空間を考える企画のほか、労働人口、若年女性数、医療機関数など、さまざまなデータを組み合わせて分析して得た発見を取材し、未来への処方箋を描き出す企画などを展開。「論説」や「山陰総合」など紙面の題字を児童・生徒の書道作品に一新しました。事業・企画は、地域の最重要課題である定住促進を図るため、島根県内の企業・団体、市町村から募った協賛金を原資に、島根県が実施している学生の就職活動にかかわる経費助成額を上乗せして「半額補助」を「全額補助」に充実させる応援事業を始めました。次代を担う若手社員(U35=35歳以下)にスポットを当て、別刷り特集の発行や本紙・デジタルでの広報、講演会・交流会の開催に取り組んでいます。

コロナ禍に加え、ロシアのウクライナ侵攻で惨禍が世界史に刻まれ、価値観や生活様式など社会のあり様が大きく変わりました。新聞の使命は、権力の矛盾を正し、弱者に手を差し伸べ、人々の自由と民主主義を守ることです。何が起きても、その使命は変わりません。地域の皆さんと共に考え、率先するコンシェルジュカンパニーとして、生活に役立ち、豊かになる情報を紙面とデジタルで発信し続け、地域を照らす太陽のような新聞、そして新聞社を目指します。

(松江市殿町にあった島根新聞社の社屋)

(松江市袖師町に移転新築したころの社屋)

(平成27年に見学者ホール「しんぶん学聞館」を併設した山陰中央新報製作センター)

沿 革

1882(M15) 5月 1日	山陰新聞社創立
1901(M34)11月 3日	松陽新報社創立
1942(S17) 1月 1日	松陽新報社と山陰新聞社が合併、株式会社島根新聞社となる 島根新聞創刊第1号を発行
1949(S24)10月 1日	有限会社夕刊島根新聞社を設立、夕刊島根を創刊
1950(S25) 2月15日	夕刊島根を夕刊山陰に改題
1952(S27) 4月 1日	社名を山陰新報社に変更、題号を山陰新報とする 夕刊島根新聞社を合併
1957(S32)10月 1日	題号を島根新聞に変更
11月23日	社名を島根新聞社に変更
1964(S39)11月21日	本社社屋を松江市袖師町に新築、移転
1969(S44) 7月28日	島根新聞紙齢1万号となる
1973(S48) 3月25日	社名を山陰中央新報社に変更、題号を山陰中央新報とし、島根、鳥取両県域に取材、営業網を拡大
1978(S53) 5月31日	松江市東朝日町に印刷工場を建設、「超高速オフセット輪転機」を導入、新聞にカラー印刷を取り入れる
1982(S57) 4月 1日	西部本社を創設
5月 1日	創刊100周年を迎える
8月 1日	益田市あけぼの本町に西部本社を新築、移転
8月24日	松江市殿町の旧島根新聞社跡地に山陰中央ビルを建設、同ビルに本社を移す
1983(S58) 6月28日	鳥取市西町に鳥取本社を創設
1991(H 3) 7月 3日	企画記事「いのち―医療現場から」が第10回アップジョン医学記事賞を受賞
1996(H 8)11月 1日	ひかわ製作センター新輪転機が稼動
1997(H 9) 8月 2日	紙齢2万号となる
10月20日	「香りの広告シリーズ」で日本新聞協会新聞広告賞奨励賞を受賞
2000(H12) 8月 1日	ホームページを開設
2002(H14) 5月 1日	創刊120周年を迎える
2003(H15)10月20日	「しまね子ども環境バンク」で日本新聞協会新聞広告賞奨励賞を受賞
2004(H16) 2月25日	浜田ビルが完成
12月25日	発行部数18万部を突破
2006(H18)11月28日	新組版システム「新SWAN II」稼働
2007(H19) 3月 1日	浜田総局を西部本社に改め、米子総局に中海事業センターを併設
5月 1日	創刊125周年を迎える
8月22日	移動編集車「サンちゃん号」導入
9月26日	超高速輪転機増設
10月 1日	題字を変更し紙面改編
2008(H20) 4月 1日	山陰中央新報製作センター発足
9月18日	第27回「ファイザー医学記事賞」大賞を受賞
2010(H22) 4月 1日	出雲・鳥取、石見の2版制に移行
2011(H23) 9月 6日	紙齢2万5000号となる
2012(H24) 5月 1日	創刊130周年を迎える
2013(H25)10月16日	「環りの海」(琉球新報社との合同企画)で日本新聞協会の平成25年度新聞協会賞を受賞
2014(H26) 3月 1日	紙面の編集段数を15段から12段に変更
3月26日	製作センターに高速カラーオフセット輪転機5基を導入。既設機と合わせて2セット体制を確立
4月 1日	無料会員組織「さんさんクラブ」スタート
11月 5日	子ども向けの無料新聞「週刊さんいん学聞」を創刊(毎週水曜日発行)
2015(H27) 6月29日	新聞制作共有システム素材管理始動
11月25日	製作センターに見学者ホール「しんぶん学聞館」完成
2016(H28) 1月18日	「しんぶん学聞館」見学者受け入れ開始
2017(H29) 1月	発行部数18万5,000部となる
4月	製作センターの輪転機3基と発送関連設備を更新
2017(H29) 5月 1日	創刊135周年を迎える
2018(H30) 4月 2日	新聞制作共有システム組版始動
2021(R 3) 4月 1日	山陰中央新報デジタル「Sデジ」スタート
2022(R 4) 5月 1日	創刊140周年を迎える

伝えて140年 121万人をカバーする情報ネットワーク

会社概要

本社	〒690-8668 松江市殿町383 山陰中央ビル 電話0852-32-3440
設立	1882(明治15)年5月1日
資本金	1億8,690万円
従業員	299人(2022年4月現在)

本社機構図

- 取締役会
  - 論説委員会
  - 編集局
    - ニュースセンター
    - 読者室
    - 報道部
    - 政経部
    - 情報部
    - Sデジ編集部
  - 編成局
    - 整理部
    - グラフィックス部
  - ビジネスプロデュース局
    - マーケティング部
    - 地域ソリューション部
    - 未来戦略室
    - 業務推進室
    - Teamりびえ～る
    - 編成部
  - 読者局
    - 読者部
    - 管理部
    - 読者戦略部
  - 文化事業局
    - 事業部
      - 事業担当
      - 観光担当
    - 出版部
    - 文化振興部
    - 文化センター
      - 松江教室
      - 出雲教室
      - 益田教室
  - コンシェルジュ局
    - コンシェルジュ部
    - 秘書室
    - システム開発部
  - 総務局
    - 人事総務部
    - 財務部
      - 経理グループ
      - 管財グループ
    - 山陰中央新報政経懇話会
    - 山陰中央新報社会福祉事業団
- 本社
  - 東京支社
    - 営業部
    - 報道担当
  - 大阪支社
    - 営業部
  - 広島支社
    - 営業部
    - 報道担当
  - 出雲総局
    - 報道部
    - 営業部
    - 読者部
  - ひらた通信部
  - 雲南支局
  - 安来支局
  - 隠岐支局
  - 西部本社
    - 報道本部
      - 報道部
    - 営業本部
      - 読者部
      - 事業部
    - 大田支局
    - 川本支局
    - 邑南通信部
    - 江津支局
    - 益田総局
      - 報道部
    - 津和野支局
  - 米子総局
    - 報道部
    - 営業部
  - 鳥取総局
    - 報道部
  - 境港支局

地域とともに
私たちが伝えます

創刊以来140年、
山陰中央新報が貫いてきたのは「地域のための報道」。
この地に暮らす人々に寄り添い、
日々の営みを伝え、支える存在であろう、と努めてきました。
製作技術がいかに革新されようと、
私たちはその信念をしっかりと受け継ぎ、新聞を作っていきます。

いつでもどこでも、確かで、役に立つ

いつでもどこでも、確かで、役に立つ情報を―。2021年4月1日、有料の新しいデジタルサービス「山陰中央新報デジタル」がスタートしました。愛称は社名のアルファベットの頭文字を取った「S（エス）デジ」です。手のひらで、リビングやオフィスで、より速く、詳しく、生活に密着した情報をタイムリーに届けたいとの思いで取り組んでいます。

速報機能が充実
独自コンテンツも満載

一日のニュースを翌日の紙面に先駆けて夕方に配信する「朝刊先読み!」をはじめ、新型コロナウイルスの感染状況や大きなニュースをいち早く伝える速報機能を備えています。気になるお悔やみ情報は会員限定で時間を早めて掲載。大型選挙は特集コーナーを開設し、開票結果の速報などに取り組んでいます。紙面に載っていない記事やコラムなどSデジ独自のコンテンツも満載です。

ニュース以外も情報提供

ニュース以外の情報提供にも努めています。新規オープンした飲食店の紹介や人気店の一押しメニュー、各種店舗で利用できる割引クーポン、防犯情報を伝える「安全安心」のコーナーなどもあります。

コンテンツと機能は利用者の皆さんの声を聞きながら随時、拡充します。欠かせない未来のメディアとなるよう今後も変革を続けていきます。

Sデジ編集部

山陰中央新報デジタル

紙面ビューアー

紙面イメージをそのまま表示し、読み慣れた新聞を読む感覚で閲覧できる機能です。更新は午前4時です。

朝刊先読み!

いわば山陰中央新報の夕刊。一日のニュースを5本程度、夕方に配信します。

お悔やみ

紙面に先駆けて前日の夕方にアップします。

クーポン

ニュースだけでなく、生活に役立つコンテンツも充実しています。

「地域主義」「地域支援」の徹底

足元の豊かさを再発見する「地域主義」、新たな豊かさを追求する「地域支援」が理念です。記者一人一人が地域に入り込んで発信する意識を徹底し、読者と双方向の紙面作りを進めています。

島根、鳥取両県をはじめ、東京、広島に記者を配置。基本方針に▽地域の生き残りを考える報道▽ルポなど徹底した読者目線の報道▽具体的な道標を示す提言型報道―を掲げ、硬軟織り交ぜたニュースを発信しています。

2013年に琉球新報社（沖縄県）と合同で取り組んだ連載企画「環（めぐ）りの海」で新聞業界の最高賞である新聞協会賞を受賞しました。高速道路の片側1車線区間ではみ出し事故が相次いだ問題では、海外取材を含めた長期連載を展開し、解決策を国に提言。安全対策を進める機運を醸成しました。

また、最大24㌻のカラー面が印刷できる輪転機を生かし、迫力ある写真や見やすい図表を随所に掲載。ビジュアル効果を高めた紙面作りも心掛けています。

選挙報道に力

社会事象や事件事故、政治、行政、住民の関心の高い生活密着型のニュース、地域社会で奮闘する人模様を描いた話題は「山陰社会面」「山陰総合面」で掲載しています。

力を入れているのが選挙報道です。国政選挙はもとより、地域住民の関心が高い市町村長選は前哨戦から詳しく伝えています。このほかにも、深く掘り下げた企画、リポートを随時掲載し、読み応えと分かりやすさを追求しています。

地域の話題から経済、スポーツまで網羅

心温まる話題は地域別のローカル面で展開し、山陰全域のローカルニュースを一覧できる紙面を提供しています。「さんいん特報班」など地域課題に焦点を当てた読み物も掲載しています。

地元の経済情勢や企業の動向などを伝える記事は、国内と合わせた経済面に収容し、経済の動きが一目で分かるようにしています。

スポーツは、テニスの錦織圭選手（松江市出身）の報道に力を入れ、海外である四大大会に記者を派遣。バスケットボールB1の島根スサノオマジック、サッカーJFLのFC神楽しまねも経営面を交えて多角的に伝えています。

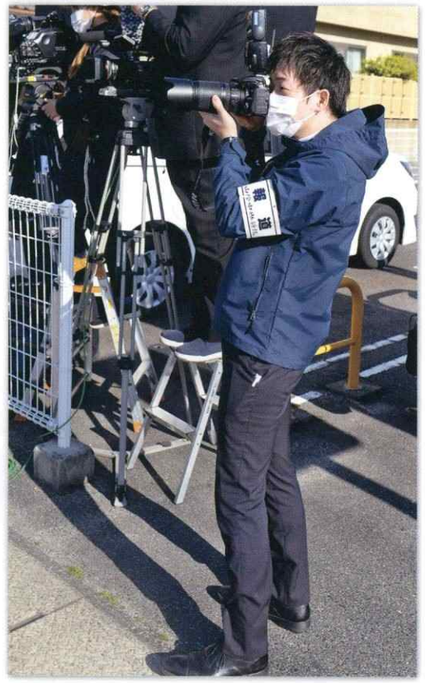
オピニオン力の強化

ニュースの核心を分かりやすく伝えるオピニオン力の強化に努めています。真相に迫る「ニュース追跡」のほか、社外の識者の寄稿、インタビューによる「羅針盤」「談論風発」をはじめ、ローカルからグローバルまで幅広い視点で物事を捉える企画も満載です。

役立つ生活情報詳しく

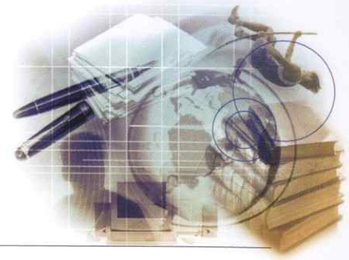
島根、鳥取両県のイベント情報を中心に、暮らしに役立つ生活情報を「生活情報BOX」に集約。さまざまな催しや行事を広域的に紹介しています。新型コロナウイルス関連では、手洗いをはじめとした予防法を複数のイラストで示すなど読者の皆さんが今、最も必要とする情報を即時掲載しています。

取材、原稿執筆に忙しい編集局フロア



第一線で活躍する記者

記者同士の情報交換も欠かせない



人に寄り添い、心を豊かに

衣食住や健康、育児・教育、流行、娯楽など、暮らしにかかわる話題を硬軟取り混ぜて幅広く、分かりやすく提供しています。論壇や芸術、文芸、人文科学の今を取り上げるのが文化面。山陰の読者の知的好奇心に応えます。

読者参加の紙面で生まれる交流

読者投稿の「こだま」欄や、小学生から学生までの「学園こだま」欄、心温まる話や愉快なエピソードを伝える「読者ふれあいページ」など、読者参加コーナーが好評を得ており、紙面を通じた交流も生まれています。1面に毎日掲載する「慈しみの心」は、インド哲学・仏教学の世界的権威である故中村元氏（松江市出身）が紹介したブッダの教えなどをつづり、読者の皆さんの生きる指針になっています。

地域密着取材から生まれる圧倒的ボリューム紙面

山陰唯一の経済週刊誌「山陰経済ウイークリー」

山陰両県で唯一の経済週刊誌となる「山陰経済ウイークリー」を発行し、地元経済の今を伝えています。1977年の創刊から40年以上の歴史があり、2020年4月には誌面を大幅リニューアルしました。表紙のデザインを一新したほか、ページ数を増やし、ニュースを深く掘り下げる大型リポートや専門家によるタイムリーなコラム、誌上ゴルフレッスン、ランチスポット情報などの企画を掲載。ビジネスパーソンに役立つ誌面作りに努めています。

読んで学んで ワクワクなるほど

こども新聞 週刊さんいん学聞（まなぶん）

地域の宝である子どもたちの健やかな成長に新聞を役立てたいと、2014年11月5日に子ども向けの新聞「週刊さんいん学聞（まなぶん）」を創刊しました。タブロイド判（本紙の半分のサイズ）12ページ。毎週水曜日に発行し、本紙購読の家庭に無料でお届けしています。▽地域の出来事や取り組みを伝える「フロントニュース」▽スポーツや文化、芸術など各分野で頑張っている子どもたちを紹介する「輝らりキッズ」▽各小中学校の活動や横顔を自筆の文章でつづる「まなびやリポート」▽働く大人たちの情熱と努力する姿を紹介、豊かな職業観を育む「仕事みてある記」▽新聞で報道したニュースのポイントや背景をわかりやすく解説する「ニュースなぜなに」▽イラスト、意見等の「投稿コーナー」－など学校や家庭で役立つ話題を満載しています。

フロントニュース
地域や学校でのさまざまな活動の現場をリポート。地域の話題や教育に関するニュースも伝えます。

週刊さんいん学聞主な企画

大地誕生の物語・宍道湖中海ジオパーク
現在の島根半島や宍道湖、中海が誕生した地殺変動の痕跡を写真や地図で紹介します。

輝らりキッズ
スポーツや文化・芸術、趣味など各分野で頑張り、輝いている子どもたちを紹介します。

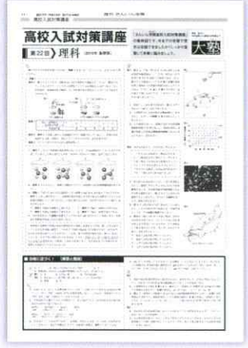
まなびやリポート
小中学生の児童会、生徒会のメンバーたちが活動や学校の横顔を自筆の文章でつづります。

仕事みてある記
働く大人たちの情熱と努力する姿に触れてもらい、豊かな職業観を育みます。

ブックトーク
面白くて素敵なところを見つけて

さんいんきらめく星
三瓶自然館サヒメルの学芸員が星空の魅力や星にまつわるエピソードをつづります。

イーハトーブのらくがき帳



高校入試対策講座

小学生基礎学力アップ講座

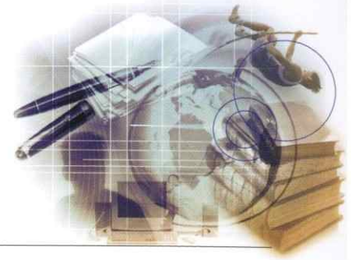
ニュースなぜなに
新聞で報道したニュースのポイントや背景を分かりやすく解説します。

ニュースアラカルト
国内外で起きたニュースをコンパクトに伝えます。

さんいん偉人学
山陰の偉人たちの歩みと功績を紹介、現代へのメッセージをひもときます。

まんがさんいん昔ばなし

山陰、日本、世界が見える紙面づくり



取　材

本社をはじめ山陰両県の総局、支局や東京、広島の支社に取材記者がおり、政治、経済、社会、スポーツなど、さまざまな分野のニュースを追っています。記者には幅広い知識と的確な判断力、豊かな表現力が求められますが、新聞の社会的な役割を実感できる仕事です。

報道デスク

デスクはより良い記事を読者に読んでもらうため、記者に取材の観点や手法をアドバイスするほか、原稿のチェック、手直しをします。

共同通信社

世界、全国のニュースを山陰中央新報社などの加盟社に配信します。

整理部
グラフィックス部

本社記者、共同通信社から送られてくる原稿や写真が集まります。地元はもとより全世界のニュースの価値を判断し、見出しを付けて専用のパソコンで組み上げます。掲載写真の加工、図版類の作製も手掛けます。

また、最先端の技術を駆使し、本社ホームページ、携帯サイトに関する業務も受け持っています。

山陰中央新報ニュースのLINEでの配信、デジタルサイネージ業務も担当します。

新聞広告はビジネスプロデュース局編成チームからデータ送信され、各掲載面に組み込まれます。

紙面をレイアウトする整理記者

高速回線

印刷された新聞はキャリアで発送へと運ばれる

印　刷

超高速輪転機で鮮明カラー印刷

編成局で組み上げた紙面は高速通信回線で、山陰中央新報製作センターに伝送。超高速オフセット輪転機を使って色鮮やかな紙面を印刷します。最大40ページ（カラー24ページ）の印刷が可能です。2017年4月にバックアップの輪転機3機と発送関連設備を更新し、一層の機能強化を図りました。

最新の印刷設備は色鮮やかな紙面を刷り上げる

発　送

配　達

刷り上がった新聞は販売拠点ごとに機械でこん包し、待ち受けるトラックに積み込みます。その後、販売店に届けられ、一軒一軒丁寧に配達されます。

見て 触れて 新聞の魅力

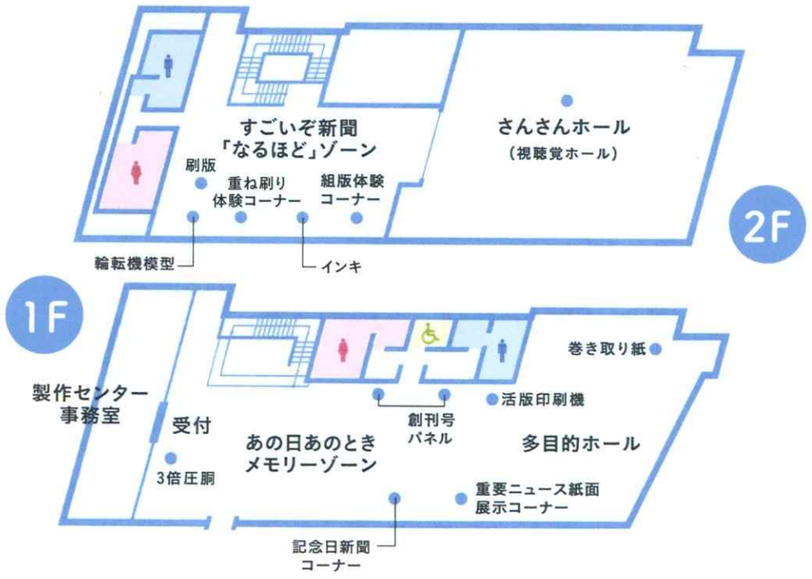
山陰中央新報製作センター見学者ホール「しんぶん学聞館」

山陰中央新報社（松江市殿町）の印刷工場、山陰中央新報製作センター（出雲市斐川町上庄原）に見学者ホール「しんぶん学聞館（まなぶんかん）」があります。映像や展示、体験学習コーナーを通じ、見て、触れて新聞の魅力や山陰中央新報を実感してもらうことができる施設です。

学聞館は製作センター東側に併設。鉄骨2階建てで、延べ床面積は830平方㍍です。「新聞ってなに」「どのようにして作られているの」…。こんな疑問に答える展示やコーナーが盛りだくさんです。「さんさんホール」には47㌅液晶パネル16枚を組み合わせた188㌅（横4.2㍍、縦2.4㍍）の大型ディスプレーを備えており、新聞が届くまでの流れや新聞の役割を紹介する映像を披露します。

実際の紙面レイアウトで使っている組版端末機や印刷の仕組みが一目で分かる輪転機模型もあります。記念日新聞コーナーではタッチパネルで年月日を入力すると、その日の新聞の1面が見られます。

併せて、最新鋭の輪転機を公開します。



見学コース

1階で記念撮影した後、2階のさんさんホールで映像「つながるメディア　山陰中央新報」をご覧いただきます。その後のモデルコースは次の通りです。

組版体験コーナー
↓
輪転機模型
↓
実物の輪転機
↓
発送エリア
↓
1階展示コーナー

あの日あのとき『メモリー』ゾーン

●創刊号パネル展示

山陰中央新報のルーツである「山陰新聞」「松陽新報」「島根新聞」の創刊号と、島根新聞から山陰中央新報に題号を改めた第1号の紙面をパネル展示しています。

●記念日新聞コーナー

タッチパネルで年月日を入力すると、その日の新聞の1面が表示されます。現在、表示できるのは島根新聞創刊の1942年1月1日から88年12月31日までと2001年1月1日以降です。

●重要ニュース紙面展示コーナー

若槻礼次郎首相や竹下登首相の誕生、東京五輪やくにびき国体、松江菓子博の開幕、山陰地方を襲った災害などを伝えた紙面を展示しています。

●印刷資料の展示

新聞は現在、高速で大量の印刷が可能なオフセット輪転機で刷り上げていますが、本社では1978年5月までは活字を使った凸版印刷方式でした。その時代の工程を伝える資料として、活字、鉛版、紙型、写真の金属版などを展示しています。

すごいぞ新聞『なるほど』ゾーン

●カラー印刷解説用の輪転機模型

藍、紅、黄、黒の順に色を重ねるカラー印刷の仕組みを輪転機の模型で解説します。各色を印刷するローラー4組が上下に並んでいます。スイッチを入れると、ローラーの回転に合わせて紙が下から上へ動きます。そうした様子から四つの色を重ねて印刷する原理を理解してもらいます。

●さんさんホール

2階の北側にあり、広さ約180平方㍍、80人の収容が可能です。東側はガラス張りになっており、開放感あふれるホールです。47㌅の液晶パネル16枚を組み合わせた188㌅（横4.2㍍、縦2.4㍍）の大型ディスプレーを備えているのが大きな特長。見学者には新聞の魅力や山陰中央新報を紹介する映像をご覧いただきます。

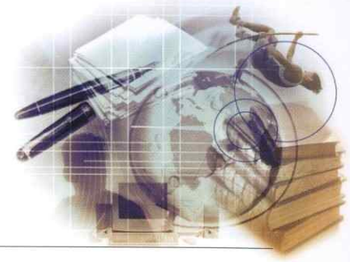
●組版体験コーナー

実際の紙面レイアウトで使っているパソコンが設置してあり、見出しづくりやレイアウトなどを体験することができます。

見学予約

◎**見学時間**　月曜～金曜日（祝日除く）1日2回　①午前10時30分 ②午後1時30分
◎**人　　数**　1組10～30人程度
個人、小グループは毎月1日（閉館の場合は翌開館日）にお願いします。
時間は、午前10時30分と午後1時30分です。
◎**所要時間**　60分
◎**予　　約**　電話で下記にお願いします（平日午前9時～午後5時）。見学日の1週間前まで受け付けます。
◎**そ の 他**　上記以外の人数についてはご相談ください。　※学校からの見学は直接、ご相談ください。

山陰中央新報製作センター　電話 0853(73)9331

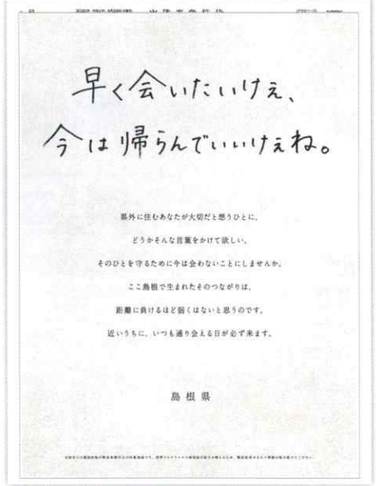


信頼と実績、圧倒的な情報発信力

企業・団体とともに地域活性化

山陰最大の発行部数を誇る山陰中央新報。地元紙として培った実績と圧倒的な情報発信力を持ち、山陰両県内はもとより全国のクライアントが広告を掲載しています。新聞は他媒体に比べて読者の消費行動につながりやすいというデータもあり、クライアントの情報発信ツールとして高い信頼を得ています。

日本全体が人口減少社会に突入する中、全国に先駆けて少子高齢化などの課題に直面する山陰両県の現状は日本の未来であると言えます。2020年春、新型コロナウイルスの感染が拡大する中で島根県が遠方に住む県出身者に向けて大型連休中の帰省自粛を呼び掛けた全面広告は、新聞協会の広告賞を受賞しました。全国に向けて問題提起や処方箋を示し、地域の活性化を図る企画を展開しています。



暮らしに役立つサブメディア デジタルにも力

地域で生活を楽しむための情報を載せた「りびえ～る」や、山陰両県や近隣県の観光スポットを紹介する情報紙「あ・るっく」、山陰を代表する企業経営者のインタビュー集「山陰リーダーズ・アイ」なども発行しています。近年はインターネットの普及に伴う社会、生活様式の変化に対応し、新聞広告にとどまらず、さまざまな媒体を利用しています。昨春始まった新しいデジタルサービス「山陰中央新報デジタル」（愛称・Sデジ）に広告枠を設け、企業・団体の情報を発信しています。

りびえ～る、いわみ りびえ～る

毎月第2、第4日曜日、中海・宍道湖圏域と、島根県西部で発行しているタブロイド判フリーペーパーです。グルメ、雑貨、ファッション、観光、園芸、子育てと幅広く生活情報を紹介し、女性から圧倒的な支持を得ています。

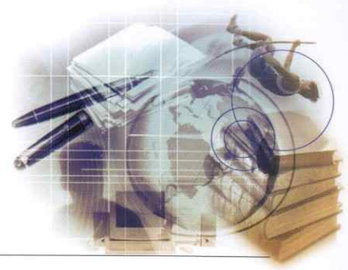
あ・るっく、Story（ストーリー）

山陰両県はもちろん、近隣県の旬のスポットを紹介する観光情報紙「あ・るっく」、若者の島根県内定住を目的にした雑誌スタイルの「Story(ストーリー)」などを発行しています。

山陰リーダーズ・アイ

山陰両県の企業、団体のトップが将来の展望や地域への思いを語る「山陰リーダーズ・アイ」は、Sデジ内に特設サイトを立ち上げ、「トップのオフ」など紙面では掲載しきれない内容も紹介しています。

文化、スポーツ、芸術 … 地域活性化　バックアップ



事　業

<文化事業>

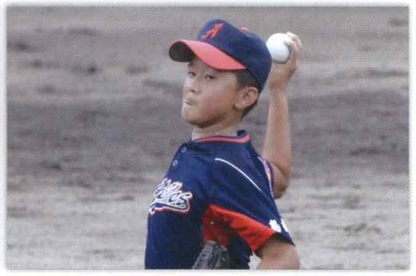
「日本伝統工芸展」「再興院展」などの全国規模の大型美術展を定期的に開催し、多くの来場者を集めています。また、地元の作家や子どもたちに作品を出品してもらう「日本の書展」「山陰子ども書道展」などの参加型事業も展開しています。「日本三大茶会」の一つ「松江城大茶会」は、茶どころ松江ならではの催しとして、県内外から多くの来場者を集め、地域の文化、観光振興に貢献しています。

再興院展

<スポーツ事業>

「宍道湖一周駅伝競走大会」「浜田―益田間駅伝競走大会（しおかぜ駅伝）」などの陸上競技をはじめ、「島根県アマチュアゴルフ選手権競技」や「山陰企業団体対抗ゴルフ大会」などを主催しています。小中学生を対象にした野球大会やバレーボール大会も開催し、スポーツ振興や子どもの健全育成に貢献しています。

島根県中学校優勝野球大会



JAカップ島根県学童軟式野球選手権大会

ゆめタウンカップ島根県小学生6人制バレーボールセンバツ県大会

山陰企業団体対抗ゴルフ大会

観　光

自主企画や旅行代理店とタイアップした国内外の旅行商品を企画販売しています。出雲や米子空港からの海外チャーター便やフジドリームエアライン、日本航空などを利用した国内チャーター便も実施し、地元の空港から発着できる旅行として好評を得ています。バスツアーでは、日帰り旅行から宿泊付きの旅行など県内外の催事や花暦に合わせた旅行、ウォーキングを行程に盛り込んだ健康ツアーなど多種多彩な旅行商品を取り扱っています。

文化振興

指定管理の重責担う
―「国宝松江城」周辺の文化・観光施設を管理

<国宝松江城、小泉八雲記念館・旧居、興雲閣、武家屋敷、明々庵、赤山茶道会館>

松江のシンボル「国宝松江城」を中心に、日本文化を世界に発信した文豪・小泉八雲を称えた「小泉八雲記念館」や「小泉八雲旧居」、城下町での暮らしぶりが垣間見える「武家屋敷」、大名茶人・不昧公の残した茶室「明々庵」の指定管理事業を展開しています。

地域文化の伝承や振興、情報発信に貢献しているほか、関連施設と連携して地域の基幹産業でもある観光振興事業はもちろん、歴史講座やスポーツイベントなども手掛けています。

国宝松江城

小泉八雲記念館

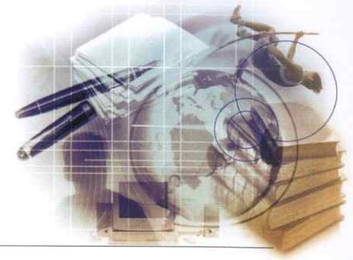
武家屋敷

小泉八雲旧居

興雲閣

明々庵

多様な情報発信に力 地方創生に貢献



出　版

山陰の自然や歴史、文化を紹介する出版活動を展開しています。松江城をはじめ、石見銀山やたたら製鉄、出雲大社のガイド本などを発行。そのほか地元作家の小説やビジネス書など、幅広い分野で後世に残る本作りを手掛け、郷土の出版界をけん引しています。自治体や企業から依頼を受け、新聞社ならではの取材ネットワークと情報の蓄積を生かし、広報誌や記念誌、社史も編集、制作しています。

本社の出版物

<主な出版物>

- 中村元　慈しみの心
- そりとむくり　彫刻家　澄川喜一
- 国宝松江城～美しき天守～(改訂版)
- 令和につなぐ不昧の心－茶室「菅田庵」修復記念－
- 地産外商～起業から成功へ突き進む「逆転」の発想
- 親子で学ぶ　堀川遊覧船と国宝松江城
- ヤマトシジミの生物学～自伝的研究誌～
- メチのいた島～語り伝える恵み豊かな島　竹島～
- 舩川利夫の人と作品～組曲「出雲路」の作曲家～
- 続石神さんを訪ねて～出雲神話から石見の巨石信仰へ～
- こども出雲国風土記
- 鉄のまほろば～山陰たたらの里を訪ねて～
- 佐々木恵未追悼画集「やさしく あったかく みんな大好き」
- 古事記1300年 神話のふるさと 山陰のゆかりの地を訪ねる
- マンガで親しむ出雲神話シリーズ・全4巻
- 「明窓」書き写しノート(改訂版)
- 空から見る山陰の海釣り

文化センター

山陰中央新報社文化センターは、松江、出雲、益田の3カ所にあり、多くの受講生に親しまれています。トップクラスの講師陣が指導し「学ぶ、出会う、楽しむ」がモットー。受講生の生活スタイルに合わせ、朝・昼・夜と幅広い講座を開講し、受講生を募集しています。

工芸・書道・茶道・華道・日舞など日本の伝統的な分野から、趣味・娯楽、健康・スポーツ、音楽、料理、ビジネス・資格取得に至るまで多種多彩。事前に講座内容を知ってもらうための無料見学・体験もできます。また、短期集中の「特別講座」や「1日体験講座」も開催しています。

季節のスイーツ&紅茶講座

写真販売

本社主催の野球やバレーボールなどのスポーツ大会、文化事業にカメラマンを派遣し、迫力ある場面、感動の瞬間を撮影し、販売を展開しています。また、山陰中央新報の紙面に掲載された記事や写真を加工した額入り商品も製作して販売しています。

紙面に掲載された写真を販売

殿まちギャラリー

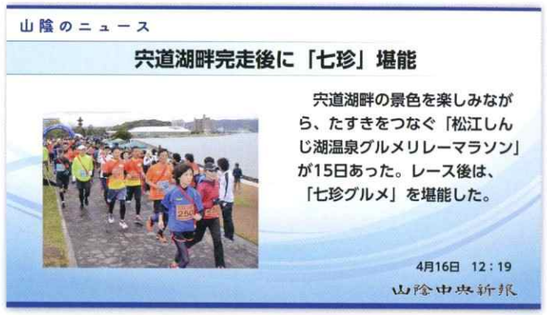
松江市南殿町地区の活性化を図るため、空き店舗を改装し、2002年6月にオープン。個人やグループによる絵画や写真、工芸、書などの作品展などに利用されており、市民の憩いの場所として親しまれています。ギャラリーには、陳列棚や机などの備品も完備しており、多目的な利用が可能になっています。

デジタルサイネージ

山陰中央新報デジタルサイネージは、インターネット回線を使って山陰両県、国内外のニュースや天気予報などを、随時更新しながらリアルタイムで配信。空港や病院での企業PR、大学での人材確保など設置場所の属性に応じた広告、イベント情報などの発信もでき、速報も可能です。今後さまざまな活用法が期待されます。

現在は出雲縁結び空港、島根県立中央病院、松江市立病院、公立邑智病院、島根大学、島根県立大学浜田キャンパス、鳥取大学湖山キャンパス、米子鬼太郎空港で稼働しています。

出雲空港のデジタルサイネージ(電子看板)



圏域振興

日本海側有数の人口集積地である中海・宍道湖・大山圏域において、県境を超えた一体的な発展に向けて官民協働の連携事業を企画・運営しています。地域の優れた産品を発掘し圏域内外に発信する「山陰いいものマルシェ」や、圏域の市長会、ブロック経済協議会などとタイアップした観光PR事業など、圏域振興に取り組んでいます。

山陰いいものマルシェ(松江)

山陰いいものプレミアムマルシェ(大阪)

山陰最大の発行部数

「信頼」と「安心」を届ける販売ネットワーク

山陰中央新報は、17万部を超える山陰最大の発行部数を誇ります。島根県内の市場占有率は75.5%で他紙を圧倒、地域ニュース満載の地元紙として絶大な信頼を得ています。

山陰両県約200店の地域に根差した販売所ネットワークを生かして、2006年8月には全販売所加盟の「山陰中央新報販売所防犯協力会」を結成。島根県や同県警と協定を結んで配達時に不審者や事故を発見した時の通報や防犯啓発、独居や夫婦だけの高齢者世帯などの安否を気遣う「サンちゃんパトロール隊」見守り活動を展開し、安心安全なまちづくりに努めています。

また、本紙を気軽にお試し読みいただける「試読紙キャンペーン」も展開し、より親しまれる新聞を目指しています。

本紙などの購読受付

新聞の定期購読は月額3,300円（税込み）
山陰経済ウイークリーの定期購読は月額3,150円（税込み、毎週火曜日発行）です。

フリーダイヤル 0120-49-2550

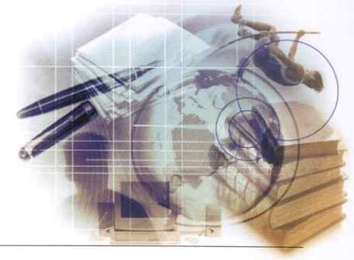
試読紙キャンペーン

山陰中央新報の紙面をもっと知ってほしい、そんな気持ちから最大14日間、未購読家庭に本紙を届けています。地元紙をお試し読みいただくことで魅力を知り、読者になる方が相次いでいます。

山陰中央新報販売所の活動

販売所では、新聞配達以外にも地元での地域貢献活動を行っています。グラウンドゴルフ大会や野球大会、相撲大会、バレー大会など幅広くスポーツ大会などを主催しています。読者や地域の方との触れ合いを大事にしています。

新聞に親しむきっかけを



新聞活用ノート

小学生に新聞に親しんでもらうとともに、家庭内学習を支援するために2020年に作成したのが新聞活用ノートです。2021年冬に実施した「新聞活用ノートチャレンジ」は、島根県内で1,000人を超える小学生が参加し、「地域の記事や世界の記事に興味を持つきっかけになった」、「親子で新聞を読み、勉強になった」など、保護者や学校からも大好評をいただいています。

各種イベントにも参加

山陰中央新報社は各種イベントにも積極的に参加し、新聞やSデジをPRしています。2022年3月には島根スサノオマジックの試合をスポンサードゲームとして開催しました。また別日にはFC神楽しまねの試合もスポンサードゲームとして開催。どちらも多くの方にブースに立ち寄っていただきました。来場者に新聞やSデジに接触してもらうきっかけ作りを行っています。

「ひと」と「まち」をつなぐ「さんさんクラブ」

会員数7万1,000人

「山陰の『ひと』と『まち』をつなぐ」をキャッチフレーズに、2014年4月に無料会員組織「さんさんクラブ」を設立しました。

山陰中央新報の購読者はもとより、未購読の方でも、小学生以上の方ならどなたでも入会できる会員組織で、会員募集開始から既に7万1,000人の会員組織となりました。

「さんさんクラブ」の会員になると、山陰地方を中心にした約670店の協賛店で優待・割引などさまざまな特典、サービスが受けられるほか、本紙ホームページの「さんさんクラブ」の専用ページ（会員サイト）や紙面で、「お得」で「暮らしに役立つ」情報を発信しています。

「さんさんクラブゴールドカード」

2019年5月から発行するクレジットカード「さんさんクラブゴールドカード」。利用額の1%をキャッシュバックするほか、空港ラウンジ、カード利用で年会費無料など、豊富な特典があります。

「さんさんクラブ」の会員特典

- ●協賛店での割引&優待
- ●購読者・会員限定の懸賞
- ●プレゼントのおトクな情報
- ●山陰中央新報主催事業などの案内&優待 など…

約670店の協賛店

飲食やファッション、レジャー・スポーツ、健康・癒しなど、暮らしに欠かせないさまざまなジャンルの協賛店が約670店参加しています。

紙面で定期的に掲載する「さんクラ通信」やホームページで最新の協賛店情報をお届けしています。

さんさんクラブのホームページ

協賛店ガイド

2021年夏に発行した「さんさんクラブ」協賛店ガイド」。ジャンルごと、エリアごとに分類されており、協賛内容が一覧できるガイドです。

さんクラ懸賞

さんクラ懸賞は、読者会員限定の大型懸賞です。毎回約120名の会員に米や肉などの食品、ギフトカードなどが当たります。

NIE（Newspaper In Education＝教育に新聞を）

NIEで児童、生徒の学びを豊かに

NIE（Newspaper In Education＝教育に新聞を）は教育現場で新聞を活用してもらい、児童、生徒の皆さんの学びをより豊かにする取り組みです。

社会への関心を深め、読解力や表現力はもちろん、最近は、情報を的確に読み解く力を育成する活動として注目されています。

活動の柱の一つは学校への出前授業です。NIE担当者や記者を学校に派遣し、新聞の読み方、情報の集め方、文章の書き方や手作り新聞の作成指導などを行っています。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、オンラインでの新聞教室も行っています。

もう一つの柱は「しまね小中学生新聞コンクール」の開催です。新聞作りを通して思考力や表現力を磨き、思いを発信してもらうことを目的に開催し、今年で11回目を迎えました。

三つ目の柱は、紙面での展開です。本紙では児童生徒の意見発表や新聞製作の場として「学園こだま」、「元気はつらつ新聞」、「青春はつらつ新聞」、「NIEのページ」を掲載。毎週水曜には小中学生向け新聞「週刊さんいん学聞（まなぶん）」も発行しています。

島根県にはNIEの推進母体として行政や教育現場、新聞・通信各社や学識経験者で1995年に設立された「島根県NIE推進協議会」があり、山陰中央新報社は事務局を務めています。

新聞は学年、教科を問わず、まるごと活用できる魅力的な教材です。山陰中央新報社は活用法の相談や実践例の紹介に応じています。気軽にお問い合わせください。

新聞記者が学校に出向き授業を担当

新聞コンクール優秀作品は各地で展示する

Newspaperプラス（就活生、社会人向け新聞教室）

NIB（Newspaper In Business＝ビジネスに新聞を）にも取り組んでいます。社会人対象の新聞活用講座「Newspaperプラス」では、企業のニーズに合わせ、新聞記者経験のある講師や現役記者が出前講座を行います。新聞を読むことを通じ、情報収集力、分析力、コミュニケーション力など、仕事に役立つ能力を磨きます。

自分の住む地域から世界の国々、身近な催し物から政治経済まで、新聞にはありとあらゆる情報が載っていて、めくるだけで広く世の中を知ることができます。幅広い知識は顧客との会話の種に、大事なことをズバリと伝える新聞記事の書き方は、報告書や企画書を書くのに役立ちます。記事の中に新規事業のアイデアを見つけられるかもしれません。

企業や事業所で行う社員・職員への一般研修や新入社員、若手社員、営業向けなどの個別研修をはじめ、就職活動中の学生、現場への着任を控えた警察学校生など、社会に出る前の準備としての講座も行っています。

Newspaperプラス新聞教室

さまざまな形で社会に貢献

●多彩な顕彰制度

地域開発賞贈呈式

「地域開発賞」は、長年にわたり地域社会の発展に尽力している人たちを顕彰する制度です。スポーツ・文化・教育・産業（2部門）・社会の5賞を設けており、1956（昭和31）年から続くスポーツ賞をはじめ、古い歴史を誇っています。選考の対象は、「受賞を機に益々の活躍が期待される社会の一隅を照らす隠れた功労者」とし、行政を中心とした関係各方面の代表者による推薦・選考を経て被表彰者を決定しています。

スポーツ優秀選手賞表彰式

「スポーツ優秀選手賞」は、全国大会で優秀な成績をあげた島根県内の中・高校生を表彰するもので、1989（平成元）年にスタートしました。将来を担う若い選手たちの大きな励みとなっており、2014（平成26）年から、国際大会や日本選手権で活躍した選手を対象とした特別表彰制度も設けました。これまでに230の団体・個人を表彰しています。

●山陰中央新報政経懇話会

「時代を読む」「ニュースの真相に迫る」をキーワードに、島根新聞社当時の1968（昭和43）年6月、社会貢献事業としてスタートしました。現在は松江・米子・浜田・益田地区の4懇話会（会員総数約200人）を運営しています。中核事業となる講演会は、共同通信社と連携して4地区いずれも2カ月に1回（年間計24回）開催し、政治・経済・社会・文化・芸能・スポーツなど各分野の一流講師を招いています。新聞とは別の角度で真相・深層に迫る情報小冊子「政経週報」なども届けています。

●山陰インド協会

山陰とインドの経済・文化交流の懸け橋として2012（平成24）年に発足した「山陰インド協会」（会長:松尾倫男山陰中央新報社社長）の事務局を担っています。同協会は、インド哲学の世界的権威で松江市名誉市民の中村元博士記念館が開館したのを機に、主にインドとの経済交流を拡大しようと組織されました。活動は、日印両国の大使館、総領事館が支援するなか、島根、鳥取両県をまたぐ中海宍道湖大山圏域の市長会や商工団体、大学、企業など産官学連携で進展しており、地方創生事業としても注目を集めています。

総会であいさつする松尾倫男会長

●山陰中央新報社会福祉事業団

1979（昭和54）年に設立。ボランティアグループの発掘・顕彰、青少年の健全育成、そして民間福祉団体への助成、被災地への救援活動など幅広い福祉活動を展開しています。活動資金は、地域の皆様から寄せられる温かい寄付によっています。義援金の受け付けはこれまでに、東日本大震災や熊本地震、西日本豪雨などで行い、日赤島根県支部や被災自治体を通じて被災地へ送りました。また、年末には歳末助け合い「愛のともしび」募金活動を実施し、寄せられた浄財を、福祉施設やボランティア団体などに配分しています。

愛のともしび募金贈呈式（石見）

●島根県茶道連盟

島根県茶道連盟（会長:松尾倫男山陰中央新報社社長）は、松江藩松平家七代藩主松平治郷（号:不昧）の功績により、松江に息づいた「茶の湯文化」の振興組織として、2014年3月に発足し、山陰中央新報社が事務局を務めています。

会員は、県内で活動する11流派16団体の約2,800人で、茶道の継承や発展はもとより、茶道未経験者に「抹茶・お菓子のいただき方」「お点前のいろは」を教える「松江藩　ちゃのゆの学校」に講師を派遣し、後継者育成事業にも協力しています。

ともに歩む関連会社

<山陰中央新報セールスセンター>

松江市嫁島町1-27

創立は1977年。営業エリアは島根、鳥取の山陰両県全域。新聞折り込み広告チラシの取扱い業務のほか、新聞やテレビ、ラジオの総合広告代理業務、山陰中央新報本紙の普及、生活応援情報紙「りびえ～る」の広告営業など、新聞関連を中心とした幅広い業務を手がけています。広告を通じてクライアントと地域をつなぐ役割を果たしています。2017年の40周年を機に、呼称を「山陰中央新報SC」としました。

<山陰中央新報松江南販売>

松江市上乃木4丁目8-25

前身の山陰中央新報販売から分離して1997年に現社名になりました。きめ細かい読者サービスの実現を目指し、松江市の橋南地区（宍道湖の南側）に3営業所を配置。山陰中央新報の販売業務を行っています。2016年4月からは、島根県庁を中心とした橋北地区の一部を販売エリアとして受け持ち、松江市黒田町に黒田営業所を設け、2営業所を配置しています。地元校からの職場体験を積極的に受け入れているほか、3階ホールを開放するなど住民とのふれあいを大切にし、地域と密着した営業活動を展開しています。

<中央新報サービス>

松江市殿町383　山陰中央ビル3階

1991年に創立した山陰中央新報の販売会社。鳥取、倉吉、米子、境港から松江、出雲、雲南に10の営業所を設けています。エリアが広く環境も違うため事業、営業活動等は地域によって異なりますが、住民に愛され親しまれる地域密着型の企業を目指しています。

<SCアドクロス>

松江市学園1丁目16-1

2017年4月に創業した総合広告会社。地域創生に結びつくコミュニケーション方法研究、地方創生事業アシスト業務、指定管理者業務、マーケティング業務、広告代理店業務、イベントプロダクション、クリエイティブデザイン、Eコマースなど幅広い分野を手掛けています。保険代理店業務も行っています。

<山陰中央新報製作センター>

出雲市斐川町上庄原1318

山陰中央新報の印刷部門として、2008年に独立しました。本紙、別刷りの印刷をはじめ、受託印刷なども行っています。タワー型と呼ぶ輪転機はコンピューター制御によって、同時にカラー24ページを含む最大40ページの新聞を印刷する能力を持っています。最大24ページ（カラー16ページ）印刷できるバックアップ機もあります。2016年1月18日に見学者ホール「しんぶん学問館」がオープンしました。

<山陰中央新報いわみ開発>

浜田市竹迫町2886

2009年に「山陰中央新報西部販売」と「山陰中央新報いわみプランニング」が合併して誕生しました。

島根県石見地方の山陰中央新報の販売・配達を主とする販売本部と、新聞・テレビ・ラジオ・雑誌等の広告、事業運営、企画提案などを中心とする営業本部の2部体制で事業展開を行っています。山陰中央新報の情報発信機能をフル活用し、地域活性化を支援しています。

<中央ビル>

<山陰中央テレビジョン放送>

創刊140年

SINCE 1882

本　　社／松江市殿町383 山陰中央ビル
TEL0852-32-3440

西部本社／浜田市竹迫町2886
TEL0855-22-0109

東京支社／東京都中央区築地4-1-1 東劇ビル17階
TEL03-3248-1980

大阪支社／大阪市北区西天満3-13-18 島根ビル3階
TEL06-6361-7187

広島支社／広島市中区立町1-23 ごうぎん広島ビル5階
TEL082-246-9033

出雲総局／出雲市渡橋町1228
TEL0853-21-0019

益田総局／益田市あけぼの本町7-3
TEL0856-22-1800

鳥取総局／鳥取市栄町401 本通りビル2階
TEL0857-39-1188

米子総局／米子市東福原2-1-1 わこうビル2階
TEL0859-34-5211

安来支局／安来市安来町762-1
TEL0854-22-2069

雲南支局／雲南市木次町里方1007-3
TEL0854-42-0062

ひらた通信部／出雲市平田町2307-1
TEL0853-27-9941

隠岐支局／隠岐の島町港町塩口63-1
TEL08512-2-0356

大田支局／大田市大田町大田イ294-3
TEL0854-84-9065

江津支局／江津市江津町1524-4
TEL0855-52-2347

川本支局／川本町川本332-40
TEL0855-72-3010

邑南通信部／邑南町矢上33-1
TEL0855-95-1330

津和野支局／津和野町後田ロ473
TEL0856-72-1678

境港支局／境港市上道町3246
TEL0859-42-3529